聖書論論争をめぐる視点からの個人的所見

村瀬俊夫

I

日本福音主義神学会の設立に参与した者たちの一人として、今はその役を終えたものと思い数年前に会員から退いているが、同会の歩みが40年を重ねたことに感慨を覚えている。1969年秋に同会の設立を呼びかけたのは、日本プロテスタント聖書信仰同盟（ＪＰＣ）に属する6名（泉田昭、宇田進、今野幸蔵、斉藤孝志、榊原康夫、村瀬俊夫）である。そして1970年4月に日本福音主義神学会が設立されたのであるが、呼びかけ人たちの背景からも明らかなように、同会は当初から聖書信仰運動の学問的深化および展開として福音主義神学の形成をめざしていた。その根底にあったのは、聖書の十全霊感を根拠に「聖書は誤りなき神のことばである」と主張する信仰的立場の学問的解明ならびに論証を重視する姿勢である。

このたび同会を退いている私に、設立時の呼びかけ人の一人であったということで、「日本福音主義神学会40年の歩みを顧みて」を特集テーマとする『福音主義神学』第41号に一文を寄せるようにとの依頼があった。ためらう気持ちが大いにあったが、この機会に歴史の証人の一人として個人的所見を述べることが許されるなら、そうしてみるのもよいのではないかという思いのほうが強くなって執筆を引き受けた次第である。

私は1929年生まれであり、敗戦を迎えたのは16歳である。それまでキリスト教とは全く無縁の境遇にいたので、敗戦のような驚天動地の出来事がなかっ

たら私がキリスト者になることなどあり得なかったであろう。戦後3年目(1948年)に、不思議な導きで家庭集会に誘われて聖書の話を聴き、また最初期のＫＧＫ（キリスト者学生会）の伝道集会で説教を聴いた。前者では聖書の話はよく分からなかったが、講師の先生の謙遜な態度に深く心を打たれた。お偉い先生がどうしてこんなに謙虚にふるまわれるのか。それまで私が接する機会のあった坊さんたちと比べて、そのことが強く印象づけられたのである。後者では講師の先生の人柄よりも説教の内容に強く引き付けられた。それは純然たる教理的説教であり、神について、人間の罪について、そして罪からの救いについて噛んで含めるように理路整然と話されることに、私は不思議に吸い込まれた。神道や仏教で漠然たる宗教心を養われていたので、このように理路整然と語られる信仰の内容に圧倒されたのである。その結果、唯一の聖にして義なる神の御前に自分が罪人であることを素直に認め、私を罪から救ってくださる方としてキリストを信じたいと心から願うようになった。

そのようにして私はキリスト者となり、1年半余の教会生活を経て神学校に入り、やがてはキリスト教の伝道者となる道を選んだ。若気の至りであったかもしれないが、これも神の摂理であったと思わざるを得ない。毎週の礼拝説教を乾いた地が水を吸い込むように聴き、聖書を熱心に読んで新約聖書の多くの部分を〔リズムのある文語訳のおかげで〕そらんじるまでになっていた。それで神学校の入学試験で聖書に関しては満点であったことを覚えている。神学校では勉強がきつくて聖書を読む時間が著しく割かれる感じだったので、入学以前に聖書をよく読んでおいたことがどれほど助けとなったか分からない。

神学校では知的な訓練が中心で、聖書や神学についてのたくさんの知識を詰め込まれ、聖書語学（ギリシア語とヘブル語）の学習に多くの時間を割かざるを得なかった。不思議にギリシア語の学習は楽しく、その関連で新約聖書についての学びへの関心が高まった。その学びの成果を生かす機会に私は若くして（30歳代半ば頃に）めぐり会えた。聖書協会発行の口語訳聖書とは別に、「聖書信仰の立場」（注・これについては項を改めてＪＰＣの誕生とともに論じる）を鮮明にした新しい聖書の翻訳事業が1960年代に始まり、その新約の部に翻訳者の一人として、さらに翻訳主任の松尾武を助けるリサーチャーとして携わることになった（1963－65年）。1965年11月に新改訳聖書の新約の部が完成し刊

行された（旧約の部の翻訳が完成し刊行されたのは1969年である）。この訳業に参加することで、新約聖書の原典であるギリシア語本文を現在知られている諸写本から確定していく本文批評の実際に触れることができた。それで私が肌で感じたことは、新約聖書の本文確定のために批評作業が必須であること、しかしそれによって絶対的な本文に限りなく近づけたとしても絶対的本文を確定することは不可能であること――この二点である。さらに身に滲みて感じさせられたのは、原典のギリシア語を日本語に翻訳するに際し、確定された本文についての歴史的・文化的背景や脈絡といった問題を明らかにする作業の重要性についてである。それは聖書の歴史批評的研究であるが、その必要性を私は聖書翻訳作業の中で否応なしに身につけさせられたのでないかと思う。

旧約と新約を合わせた新改訳聖書の完成と刊行を機に、この新改訳聖書の訳文に基づく聖書注解書刊行の企画が持ち上がったのは、当然の時の勢いである。その企画が〔新改訳聖書の刊行で中心的役割を果たした〕いのちのことば社で進められたのは、日本福音主義神学会が設立されて間もない頃に当たる。日本福音主義神学会の設立に促されて『新聖書注解』刊行の企画が実現へと向かうようになった、と見ることもできるであろう。『新聖書注解』は最初に新約の部を全3巻で刊行することになり、3名の常任編集委員の一人として私が関わることになったのは40歳代前半の時期である（なお執筆者は全員、新改訳聖書の訳業に参加した方々や福音主義神学会の会員であった）。この仕事に私は精魂を傾けて当たり、第3巻（1972年9月）、第2巻（1973年5月）、第1巻（1973年11月）の順で刊行することができた。

常任編集委員による「刊行のことば」は、この注解書の特色として、第一に〔福音派陣営における〕日本人のみの執筆者の書き下ろしであることを述べた後、次のように記している。「この注解書の第二の特色は、たいへん欲張ったことであるが、最新の聖書学の成果を聖書信仰の立場から十分にくみ取りつつ、しかも信徒のかたがたに親しんで読んでいただける注解をめざしたことである。今日的情況において福音の真理を明確にするために、適度の批評的な問題を扱っている。学問的な方法と信仰的な情熱とが調和を保つように、各執筆者は最善の努力を傾けたつもりである」と。なお全3巻の刊行を終えることとなった第1巻の〔編集委員一同による〕「あとがき」に、次のように記した一文がある。

「ここに主の導きによって完成を見た『新聖書注解』(新約)」が、特に聖書信仰(聖書は誤りなき神のことばであり、信仰と生活の唯一・絶対の基準であると告白する信仰)に立つ日本の福音的諸教会において用いられ、いっそうの福音の理解と前進、ならびに教会の成長に役立つことを通して、主の御名があがめられることを、せつに願ってやみません。」

Ⅱ

私にとっての二つのキー・ワードは、「聖書信仰の立場」と「適度の批評的な問題」である。前者に関わる「聖書信仰」という用語は、私の意識では 1959 年になって知ったものである。その年に日本プロテスタント宣教 100 年を記念し、改革派を含む福音派の諸教会・諸団体が協力して「宣教 100 年記念聖書信仰運動」を全国的に展開した。翌 1960 年には、この運動を一過性のものとして終わらせないための継続的組織として、「日本プロテスタント聖書信仰同盟」(英語の Japan Protestant Conference の頭文字をとってＪＰＣと呼ばれる)が誕生した。「聖書信仰」という語は英語の名称にはなく日本語の名称にだけ付されている。それだけ日本の福音派に「聖書信仰」を意識し強調したい思いが強かった、という証左であると思う。

この「聖書信仰」という表現に、私はなかなか馴染めなかった。今も何かしらしっくりしないものを感じているので、自ら進んで「聖書信仰」を口にすることはない。上述のＪＰＣに 1964 年頃には自覚的に身を投じており、同年 2 月に開かれた第 5 回全国協議会に参加、月刊機関紙『聖書信仰』の編集部の一員に加えられた。そして早速『聖書信仰』43 号(1964 年 4 月)の第 1 面に「エキュメニカル運動について――その必然性と問題性」と題する一文を寄せている。同号には第 5 回全国協議会で語られた岡田稔(神戸改革派神学校校長)の「エキュメニカル運動とＪＰＣ」と題する講演要旨が掲載されているが、私の一文はそれに触発されたものであろう。このようにＪＰＣの組織の一員として活動する中で、私もＪＰＣが主張する「聖書は十全霊感による誤りなき神のことばであり、信仰と生活の唯一無謬の規準であると信じる」という立場で「聖書信仰」を受け止め、それを口にし、真正面から取り上げて文章を書くように

なった。『聖書信仰』68 号(1966 年 6 月)には、「聖書信仰の吟味と反省――『霊感された言語』の絶対性について」と題する一文を寄せている。この一文に、当時 37 歳であった私の問題意識がよく示されている。

ここで私が「聖書信仰」という用語について抱いていた違和感について述べておきたい。「聖書信仰」という語感から私が受ける第一印象として、「福音信仰」や「キリスト信仰」と言うときと同じように、すなわち、福音もキリストも信仰の対象であるように、聖書が信仰の対象となるという意味合いが先行してしまう。私にとって、聖書は尊敬の対象であっても、決して信仰の対象ではない。聖書に示されている福音もしくはキリストこそ私の信仰の対象であるが、聖書そのものは決して私の信仰の対象ではない。そういうことで私自身は、ＪＰＣの組織の一員として活動するときは別として、個人として聖書信仰という言葉を使用することには極めて消極的であった。その証拠に、私がＪＰＣの責任ある一員(実行委員ならびに「聖書信仰」編集委員会委員長)として活動し始めた時期と並行する 1968 年から 1971 年にかけて、当時いのちのことば社から「信仰良書選」シリーズとして刊行された私の 4 冊の著書には、一度も「聖書信仰」という用語が使われていない。それらの著書を発行順に列挙すれば、『聖書は何を教えているか――聖書教理入門』(1968 年)、『門をたたけ――キリスト教入門』(1968 年)、『キリスト者の生活――信仰生活入門』(1970 年)、『聖書の中心的な流れ』(1971 年)である。第 4 冊目に副題を付けるとすれば「聖書神学入門」である。

しかし、ほとんど同時期に、私はＪＰＣの責任ある一員として、「聖書信仰」をＪＰＣ規約の定義の通りに受け入れ、聖書信仰を神学的・実践的に掘り下げ、また展開するための出版事業に深く関わっていた。先に言及した『聖書信仰』68 号(1966 年 6 月)に掲載の一文「聖書信仰の吟味と反省――『霊感された言語』の絶対性について」には、聖書信仰についての私の神学的思索の一端としての問題意識が吐露されている。「聖書は誤りなき神のことばである」という主張は、書かれた聖書の言語が〔部分的にではなく〕十全に(すなわち、全部)霊感されているという十全霊感説に支えられている。すると、十全に霊感された言語とは、どういう言語なのか。考えられるのは「絶対的な意味をもつ、不可謬である言語」という概念である。しかし、そんな概念の言語を歴史的次元にお

ける文化的現象の中に求めるのは、〔すべて歴史的なものは相対的であることを免れないのであるから〕不可能である。そこで私が注目したのは、歴史の中で「終末論的出来事」として生起する神の歴史的啓示についてである。この神の歴史的啓示のクライマックスに、イエス・キリストの〔受肉、生と死と復活によって実現した〕救済の出来事がある。そして、この終末論的出来事を伝達する手段となる聖書の言語も、霊感という聖霊の働きを介して「終末論的言語」とされ、神の啓示の目的に合致しての絶対性と不可謬性が保障される〔と私は考えたし、今もそのように考えている〕。その意味で、「聖書は〔キリスト者にとって〕信仰と生活の唯一無謬の規準である」と告白することができる。1969年にＪＰＣの最初の刊行物として『現代と聖書信仰』と題する論集（羽鳥明・村瀬俊夫・泉田昭編）が、いのちのことば社から発行された。それに私が寄せた「聖書信仰の神学」と題する論稿に、以上の私の考えがかなり系統的に述べられている。

その終わりのほうで（『現代と聖書信仰』58-59 頁）、以下のように述べている。

＜聖書が徹頭徹尾「神のことば」であるということは、あくまで救済史的基盤に立って有機的に考察され、受け取られなければならない。そのことから、聖書の十全霊感は、それを質的な面から考察すれば「有機的霊感」と呼ばれるであろう。「神のことば」としての聖書は、全体が有機的一体を保つように霊感されているのであるから。＞

＜歴史的・文化的性格を帯びた人間の言語は、その意味内容において、いつも流動的・相対的なものであることをまぬがれない。それゆえ、霊感された言語の絶対性・不変性を客観的に保証するところのものは、単なる歴史的・文化的次元のうちにではなく、救済史における終末論的観点において認められるのである。その意味において、霊感された言語とは、歴史的・文化的次元の中で終末を先取りしている「終末論的性格の言語」であると言える。＞

＜霊感された言語は、聖霊の働きと不可分の関係にある。霊感された言語の終末論的性格――その絶対性と不可謬性――を保証し、それを私たちに確信させてくれるものは、聖書を通して働かれる聖霊の導きにほかならない。この聖霊の導きは、霊感の事実とは区別して「聖霊の内的なあかし」あるいは「聖霊の照明」と呼ばれている。「聖書は誤りなき神のことばである」という主張は、聖書を通して働かれる聖霊の導きによらなければ、だれも告白することのできない信仰的真理なのである＞。

Ⅲ

孔子は「三十にして立つ。四十にして惑わず」（『論語』為政第二）と言ったが、そのように私も30代半ばで聖書論に関する神学的思索で終末論的視点に立つことを知り、40歳の頃には私なりの「聖書信仰の神学」を不惑のものとして確立していたことになる。それから40年を経て私は孔子より長生きしているが、聖書論に関する基本的な立場は少しも変わっていない。そう言い切ってしまうと、聖書論あるいは聖書信仰をめぐる神学的思索において私の進歩と成長が止まってしまったように思われるかもしれない。もちろんそんなことはなく、私なりの進歩と成長を遂げ今日に至っている。そのために私は、聖書の歴史批評的研究（聖書批評学）と密接に関わる聖書神学に深く関心を寄せるようになっていた。それで『現代と聖書信仰』に次ぐＪＰＣの刊行物の第二弾として翌1970年に出版された『なぜ聖書信仰が必要か――神学／教会／倫理』（蔦田二雄・石丸新・村瀬俊夫編、いのちのことば社発行）に、私は「聖書信仰と聖書神学」と題する論稿を寄せている。その意図が次のように記されている。

＜再び与えられたこの機会に、最近の聖書神学の成果が、どのようにＪＰＣが主張する聖書信仰の理解にかかわり、また積極的に貢献しているかについて、少しばかり思想史的な考察を加えながら、私なりに書いてみたい。そうすることによって、現代の神学的状況にふさわしい新鮮な聖書信仰の理解が与えられるなら、これからのＪＰＣの健全な成長と発展に大いに役立つと信じるからである＞（45頁）。

この「聖書信仰と聖書神学」と題する論稿は、私の「聖書信仰の神学」が受肉化されたものと言ってもよく、その神学的思索の発展線上に今もあることは間違いない。このように私を導いてくれた神学的先達として、私がその著書や論文から多く教えられた方の名を挙げるなら、まずオスカー・クルマンである。

仏独両文化圏のストラスブール生まれ（1902年）の聖書神学者で、スイスのバーゼル大学教授であったときドイツ語で著した *CHRISTUS UND DIE ZEIT*, 1946で世界に知られるようになった。それに改訂を加えた第2版（1948年）に基づく邦訳『キリストと時』が前田護郎訳で岩波書店から刊行されたのは、私が東京神学塾を卒業して弱冠24歳で開拓伝道へと押し出された翌年（1954年）のことである。その訳書を私が手にしたのは第3刷（1957年3月）であるから28歳になったばかりのときである。開拓伝道を開始した当初は無我夢中であったが、それでは知的資源が枯渇してしまうという思いで、一年後には伝道牧会をしながら慶応大学の通信教育過程で学ぶようになり、1958年4月の大学院進学をめざして1957年4月から通年スクーリングで三田のキャンパスに通っていた。その通学の車中で夢中になって読んだのがクルマンの『キリストと時』である。本格的な神学書といってよいものを、どうして車中で飽きずに読みふけることができたのか。答えは簡単で、私にとってそれほど魅惑的な内容であったからである。

この訳書には「原始キリスト教の時間観及び歴史観」という副題が添えられている。著者の初版序文（1945年12月執筆）によると、三人の神学者の書が新約聖書の中心的思想に対する著者の理解を明確にするのに役立った。それらの書とは、マルティン・ヴェルナー『キリスト教教義の成立』（*Entstehung des christlichen Dogmas*, 1941）、ルドルフ・ブルトマン『啓示と救済の出来事』（*Offenbarung und Heilsgeschehen*, 1941）、カール・バルト『教会教義学』（*Kirchliche Dogmatik*, 1939ff.）である。原始キリスト教の宣教における終末論の位置づけについてヴェルナーに学びつつ、様式史的方法から救済史の神学的意味をその全体的展開から汲み取るべきことを〔その展開を単なる枠とみなして非神話化することには反対しつつ〕ブルトマンから多くの示唆を受け、さらにバルトの神学的立場を肯定して「新約の信仰の、徹底したキリスト中心の性格を強調する点で、筆者（クルマン）はバルトと軌を一にする」（v頁）と記している。ヴェルナーの名は初めて知ったが、バルトとブルトマンのことは東京神学塾で警戒すべき危険な神学者として教えられていたので、クルマンの両者への評価には〔少々大袈裟な表現かもしれないが〕驚天動地の思いであった。それほどクルマンの『キリストと時』の教説が私の心と知性を魅了したという

ことでもある。

それまで私が身を置いてきた〔聖書信仰に立つ〕教会やＫＧＫの交わりや神学校では聞いたこともない新しい神学用語や概念、また神学的方法論に接して目が覚める思いであった。こんな神学の世界があったのか、いや、これこそ本物の神学の世界ではないか、という思いを〔まだ口にすることができなかったので秘かにではあるが〕強く抱かされ、その思いが心に深く刻まれた。クルマンの『キリストと時』は、車中で読みふけっただけでなく、机の前でも気合を入れて読んだので、現在ボロボロに近い形で手元にある本には赤線や青線がたくさん引いてある。熟読玩味した証拠であり、私はクルマンから救済史の神学をしっかり叩き込まれた。イエス・キリストの来臨の出来事は、救済史の中心に立つ出来事である。イエスの歴史的活動と十字架の死、それに続くキリストの復活の出来事において、救済の実現という終わりの日の出来事が〔先取りする形で〕生起したのであり、救済史を〔私の好みではないが〕戦闘にたとえれば、最後の勝利を決定づける戦闘が既に行われたのである。このことに「時の中心」を置いているのが原始キリスト教の時間観・歴史観である、というのがクルマンの主張である。現在の教会の歴史は最後の「勝利の日」をめざしているとしても、そのことに中心的な意味があるのではない。中心的な意味があるのは、《最後の勝利を決定づける戦闘が既に行われた》と確信するイエス・キリストの出来事である。このことを確信させてくれるものが聖霊である。その意味で「聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証（手付け金、先取り）であられます」（エペソ 1:14）と言うことができるのだ、と私なりに妙に納得させられたのである。

クルマンの救済史の神学から学んだことはたくさんあるが、もう一つ挙げるなら、「終末論」という概念を聖書に即してダイナミック（動態的）なものとして教えられたことである。イエス・キリストの出来事は時の中心であり、未来の完成を先取りする終末論的出来事である。このように理解するとき、以下の新約の諸聖句が腑におちるように首肯できた。「神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、……語られましたが、この終わりの時には、御子〔イエス・キリスト〕によって語られました」(ヘブル 1:1-2)。「キリストは、世の始まる前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために、現れて

くださいました」（ペテロⅠ1:20）。キリストの再臨による救済の完成としての終わりを待ち望むことも重要な課題であるが、そのことが新約の福音の中心テーマなのではない。「既に」実現したと確信する現在終末論と、「未だ」完成していないのでその完成を待望する未来終末論との緊張関係の中で歴史的な歩みをしているのが、私たちキリスト者および教会である。

クルマンのほかに、私の神学的先達となった方々の名（肩書きは1960年代頃のもの）を挙げれば、ヘルマン・N・リダボス（オランダ改革派カンペン神学校教授）、F・F・ブルース（英国マンチェスター大学神学部教授）、G・W・ブロムリー（米国フラー神学校教授）である。リダボスの著作で私が特に愛読したのは、*WHEN THE TIME HAD FULLY COME*, 1957, Eerdmans と *REDEMPTIVE HISTORY AND THE NEW TESTAMENT SCRIPTURES*, 1963, Presbyterian and Reformed の二冊である。どちらも熟読玩味し、クルマンから学んだ救済史観に立つ神学思想を、新約聖書の正典と権威の観点から考察を深め、それを身につけさせていただいたことを感謝している。新約聖書の正典としての権威（ある意味での絶対性）は、歴史の相対性と無縁ではあり得ない。それゆえ正典である聖書についての歴史批評的研究を無視してはならないし、まして敵視するようなことがあってはならない。聖書信仰と聖書の歴史批評的研究とは相容れないものと強調するファンダメンタリズム的な空気の中で息苦しい思いをしてきた私にとって、聖書の歴史批評的研究に開放的な態度をはっきり示していてくれるブルースの諸著作は、どれほど助けになったか分からない。聖書信仰の立場から聖書の真理を解明するためにも、聖書の歴史批評的研究は必要であり、むしろ有益なものである。それは聖書の真理を拒否するための破壊的な歴史批評的研究ではなく、聖書信仰に立って聖書の真理を鮮明にしてくれるのに役立つ歴史批評的研究である。それこそ、私にとっての第二のキー・ワードである「適度の批評的な問題」が意図していたことである。

ブロムリーからは、彼自身がカール・バルトの『教会教義学』の英訳者であるということから、バルト神学に一定の関心を示すことが聖書信仰の立場からも許されるのだ、という感触を得ることができた。クルマンが「新約の信仰の、徹底したキリスト中心の性格を強調する点で」バルトの神学的立場を肯定していたことから、秘かにバルトへの関心を寄せた私は、彼の著作に触れたいとの

思いで井上良雄訳『教義学要綱』（初版1951年、新教出版社）を手にして一読した。そのとき神学書を読んでいるのに、心を燃やされるという体験を初めてしたことが忘れられない（クルマンの『キリストと時』には魅了されても心が燃やされるということはなかった）。バルトの論述の何が私の心を燃やしてくれたのか。それは逆説的な弁証法的論理の展開であったと思う。それに私の心の波長が妙に合ったのである。『なぜ聖書信仰が必要か――神学／教会／倫理』に寄せた論稿「聖書信仰と聖書神学」の中で、「バルトをめぐって」いう項を立てて、そのことに〔ためらい気味に〕言及している。

＜バルトは弁証法的な対立概念の並立による逆説的表現をあきずに用いている。それにうんざりさせられる人も多いであろう。一般に、正統主義者も自由主義者も、「真理は単純である」と考える点で共通している。それゆえ両者とも、逆説的な弁証法的論理には批判的である傾向が強い＞（50頁）。

「バルトに好意的に書きすぎたかもしれない」と気にかけつつ、すぐ続けて私は〔以下のように〕はっきり書いている。

＜しかし、聖書の中心主題に迫ろうとするとき、逆説的な緊張関係にある弁証法的概念の助けなしに、それを洞察することの困難な場合も少なくない。福音の中心主題である「神の子の受肉」「死者の復活」「神と人間との和解」の諸事実は、それ自体がすぐれて弁証法的である。それから、私たちの「聖書は誤りなき神のことばである」という主張も、聖書が歴史的には人間のことばで書かれている事実を考えると、まさに弁証法的な逆説（パラドックス）であるということになる。＞

バルトが第一次世界大戦後の20世紀の神学界に彗星のように現れたのは、1919年の『ローマ書講解』初版の刊行によってである。1922年に全面的に改訂された第2版以降のものが定本となり、その邦訳版の一つが小川圭治・岩波哲男訳で河出書房新社から1968年に刊行されたものを入手し、それに掲載されていたバルトによる「第一版への序」を読んで、バルトがこんなことを言っているのかと衝撃を受けるとともに感動した。それは以下のように書き出されている文章で、上述の論稿「聖書信仰と聖書神学」にも引用しておいた（『なぜ聖書信仰が必要か』48-49頁）。

「パウロは、その時代の子として、その時代の人たちに語りかけた。しか

しこの事実よりもはるかに重要なもう一つ別の事実は、かれが神の国の預言者また使徒として、すべての時代のすべての人たちに語りかけていることである。昔と今、あちらとこちらの区別には、注意しなければならない。しかしこのことに注意するのは、この区別が事柄の本質においては何の意味も持たないと知るためでしかありえない。聖書の歴史批評的研究法は、それなりに正当である。むしろ聖書の理解のために、欠くことのできない準備段階を示している。だが、もし私がこの方法と、古めかしい霊感説とのどちらかを選ばなければならないとすれば、私は断然後者をとるだろう。霊感説は、はるかに大きく、深く、重要な正当さを持っている。なぜなら、霊感説は、理解の仕事そのものを示しており、それなしでは、すべての準備は価値を失ってしまうからである。もちろん私は、この二つのうちどちらかを選ぶ必要のないことを喜んでいる。むしろ私がひたすら注意力を集中したのは、歴史的なものを透視して、永遠の精神である聖書の精神を洞察することであった。かつて重大であったことは、今日もまた重大であり、また今日重大であって、ただの偶然や気まぐれでないものも、かつて重大であったことと直接のかかわりを持っている。われわれが自分自身を正しく理解しているならば、われわれの問いはパウロの問いである。」

このバルトの言明から、筆者である私は、聖書の歴史批評的研究法（聖書批評学）が聖書信仰と対立するものではなく、かえって聖書信仰に立つ聖書の理解に不可欠な準備作業の一環である、という納得を得ることができた。聖書は神のことばであるが、それが歴史的背景において成立した人間のことばの記録であることも事実である。私たちが「聖書は誤りなき神のことばである」と信じる信仰的認識に到達するのは、あくまで聖書も他の書物と同様「歴史的背景において成立した人間のことばの記録である」という事実を透視してのことである。これまで神のことばである聖書の権威の客観性を重視する聖書信仰の立場を教えられ、その形式論理の枠を越えない論法に飽き飽きしていた私にとって、バルトが提示してくれた弁証法的論理はとても新鮮で、一気に喉の渇きをいやされるような思いで受け止めることができた。そのおかげで、「霊感された言語の終末論的性格」という、かなり弁証法的論理の妙味を秘めた〔私なりの〕理解に導かれたのである。

Ⅳ

先述した『新聖書注解』新約全三巻の刊行は、聖書信仰とのバランスにおいて「適度の批評的な問題」を取り扱うことができたおかげであると思うが、聖書信仰をはっきり表明する福音派の諸教会だけでなく、日本基督教団や日本キリスト教協議会（ＮＣＣ）系の諸教会からも好意的に受け止められ、版に版を重ねることができた。そのおかげで、私としては極めて満足すべき状況で、1970年代半ばから後半にかけてＪＰＣ実行委員（また日本福音主義神学会理事）として活動し、ＪＰＣ機関紙『聖書信仰』の編集委員長としての任を1974年12月号（156号）から1979年2月号（198号）まで果たしている。編集委員長を辞したのは多忙のためという個人的事情等によるものではなく、1978年6月に日本福音同盟10周年記念として日本福音同盟（ＪＥＡ）から刊行された『はばたく日本の福音派』に、私が寄稿した「新しい時代に向かう福音派の神学」の中の文章が物議をかもすようになったからである。それにしても、この論稿において私は、これまでの神学的思索を総合して提示し、新しい時代に向けての福音派の飛躍と前進に役立てたいと願った。その意欲を示す箇所を抜粋し、引用しておきたい。

＜かつては、聖書信仰に立つ福音派であることは、キリスト教界において、主流ではなく明らかに傍系に位置づけられていて、何となく肩身の狭い思いをさせられていた。筆者自身の経験から言うと、そのように感じさせられた要因の一つは、福音派の学問的レベルが低く、すべての面で非常に遅れているという意識であった。それが福音派の知的コンプレックスとなっていたように思う。ところが、今日では状況がかなり変化し、福音派の知的コンプレックスは次第に解消されつつある。その顕著な事例の一つは、昨年（1977年）の秋、福音派に属する日本人執筆者の手になる『新聖書注解』旧新約全7巻の完成を見たことである。これによって、日本の福音派は、非福音派に対して遜色のない聖書学的水準を示すことができた。日本のキリスト教界において、福音派は決して無視されることのできない重要な存在となってきている＞（119-120頁）。

「適度の批評的な問題」が取り扱われているので、私は『新聖書注解』全７巻の完成を心から喜び、この水準から後退することなく聖書信仰の展開が見られることを願っていた。しかし「適度の批評的な問題」の取り扱いに〔私が秘かに心配していたことであるが〕ＪＰＣやＪＥＡ内の人々から批判や時には非難が向けられるようになった。そういう火種があったので、時あたかも米国で燃え上がりつつあった聖書論論争の火の粉が日本に飛んでくると、日本でも論争の火が燃え上がるようになった。そのことは改めて述べるので、もう少し私の所論に目を留め、耳を傾けていただきたい。

＜「聖書は誤りなき神のことばである」と告白する聖書信仰は、救済史を背景に持ち、それとの不可分の関係にある。聖書の成立に見られる歴史的・人間的側面にかかわる多様性を貫く聖書の統一性は、この救済史において保証されている。聖書的啓示（あるいは真理）の中心は、救済史の中心に立っておられるイエス・キリストである、と言うことができる（ヨハネ5:39；テモテⅡ3:15参照）。

聖書が「神のことば」として私たちに語りかけるメッセージは、救済史における「神の大きなみわざ」（使徒 2:11）――その中心はイエス・キリストの受肉・死・復活の出来事――である。そして、聖書は、その神の大きなみわざを見て信じた人々の証言に基づくケリュグマである。彼らが証言している救済史は、決して神話のようなものではなく、真実の歴史である。ただし、それは神のみわざの歴史である。したがって、それは必ずしも科学的実証主義に立つ歴史研究の対象になりうる歴史ではない。しかし、救済史の舞台で神のみわざを見、神のことばを聞いた人々にとって、それは真実の歴史であった。この歴史が、神のことばが啓示される場となっている＞（129-130頁）。

＜今日の聖書神学は、聖書の真理が歴史的・科学的研究によって実証できるような性質のものではない、ということを知っている。たとえば、今日の聖書研究は、キリストの復活の史実性を歴史的・科学的方法で論証できるとは考えていない。その史実性は、キリストを死者の中から復活させた神のみわざに対する信仰によってのみ確証できるものである。その信仰は、信頼できる歴史的証拠を欠いているのではない。キリスト教会は、復活のキリストと出会った人々（使徒たち）の証言と宣教の上に建てられた。その使徒的証言ならびに宣教は、究極的な事実的真理として理解されるのでなければ、その本来の意味を失うことになる＞（132頁）。

以上の二箇所の文章が、聖書は歴史的事実においても科学的事実においても誤りがないと信じる立場の、いわゆる「無誤性（inerrancy）」論者から批判され、私の見解が聖書信仰に反するものであるかのように非難もされたらしい。「らしい」と書いたのは、私に直接向けられたものではなく、間接的に私に伝えられたものだからである。そういう空気が私にも感じられてきたので、『聖書信仰』の編集委員長を降りることになった。聖書論論争に言及する前に、もう１箇所、その論争に対する私の明確な解答を示していると思われる、論稿の末尾に近い文章を〔熟読玩味していただければと願って〕引用しておきたい。

＜聖書の霊感について、もう一つ注目しておきたいことがある。それは、聖書の歴史的多様性の面において見られる、聖霊の自由な活動の余地を認めることの重要性である。福音書の資料の伝承において、そのことを認めるのは非常に重要である。その点に目をふさぎ、聖書の歴史的・人間的側面を否定するなら、仮現論的な聖書観に陥ることになる。それは聖書の性格を根本的に見誤らせ、ひいては神のことばとしての聖書の権威（不可謬性）の本質をそこねる結果となる。硬直した根本主義者たちがこの過ちに陥っていたことは、あえて指摘するまでもないであろう。

聖書の権威は、その不可謬性（infallibility）にある。これはカルヴァンが指摘しているとおり、聖書のアウトピストスに基づくアプリオリなものである。それには、もちろん救済史的統一性が深いかかわりを持っている。歴史的・人間的側面、あるいは文化的・科学的側面における無誤性（inerrancy）は、救済史的統一性とは別のものであって、不可謬性とははっきり切り離して扱わなければならない。筆者の考えでは、無誤性の問題を霊感の前提とするのは、はっきり言って誤りである。しかし、まだ福音派の聖書観には、この点でのあいまいさが残っている。現にアメリカでも、そのための論争が盛んに展開されている（原注・H. Lindsel, *Battle for the Bible* 参照）。

筆者としては、聖書の不可謬性を保証するものとして霊感の事実（教理

というよりも事実！）がある、と考える。これは何よりも宗教改革者たちの考え方であった。それ以上に、それは聖書自身の考え方であり、あり方そのものなのである。それゆえ、これが正統的な見方であると言わなければならない。

聖書の権威と不可謬性は、その救済史的統一性と不可分である（そのことは、聖書の性格と目的と不可分である、と言い替えてもよい）。したがって、救済史的統一性のかなめであるキリスト論と終末論、その適用である救済論と教会論等とのかかわりで、聖書論が深化され展開されていかなければならない。そのような具体的展開こそ、新しい時代に向かう福音派の神学に課せられた重大な使命である＞（135－136頁）。

V

1980年代前半は、聖書論をめぐる状況において、私には辛い時期となった。上に引用した拙論で私が「はっきり言って誤りである」とした無誤性の問題を霊感の前提とする考え方が、米国で〔なんと私が拙論を公表したのと時期を等しくして〕1977年に設立された「聖書の無誤性に関する国際協議会」が1978年10月にシカゴで開催した研究会議で公表した「聖書の無誤性に関するシカゴ声明」に打ち出されていたのである（声明の全文の邦訳が宇田進『福音主義キリスト教とは何か』1984年、いのちのことば社、222頁以下に掲載されている）。私にとって特に問題と感じる箇所（＜主張と否定の諸条項＞の12）を紹介しよう。

12　聖書はその全体において無誤であり、偽りや虚偽や欺きが一切ない、とわれわれは主張する。

聖書の不可謬性と無誤性は、聖書の霊的、宗教的、救済的な事柄に限定されるものであって、歴史や科学の分野にかかわる記述は除かれるという考え方をわれわれは否定する。また、創造や洪水に関する聖書の教えをくつがえすために、地球の歴史に関する科学的仮説を用いることは正当化される、という考えも否定する。

この米国発の無誤性の主張を柱とする聖書論論争が1980年代になって日本

にも〔一部の人々には〕大波のように押し寄せてきた。それがＪＰＣやＪＥＡ、また日本福音主義神学会にも波紋を投じるようになった。私は1981年4月から『聖書信仰』の編集委員長に幸か不幸か復帰したので、無誤性と切り離した不可謬性の立場で聖書の権威を主張する論説を、私と見解を同じくする若手の牧師（神学者）の協力を得て、連載するようになった（それで再び私は編集委員長を降ろされることになる）。その論稿の背景にあった欧米の福音的神学者たちとその著作を挙げておきたい。オランダ改革派教会の代表的神学者G.C.ベルカウワー(Berkouwer)の教義学研究シリーズの一冊に『聖書(*De Heilige Schrift*)』があり、その英訳版 Holy Scripture が1975年に米国で刊行されていた。その訳者ジャック・ロジャース(Jack Rogers)は、ドナルド・マッキム(Donald MaKim)と共著で *The Authority and Interpretation of the Bible* を刊行した（1979年）。マッキムは彼の編集で、F.F.ブルース、ベルカウワー、H.N.リダボス、ロジャースを含む12名の寄稿者による論集 *The Authoritative Word* を刊行した（1983年）。これらの著作が邦訳されていたらどれほど益したことであろうかと悔やまれるが、マッキム編集の *The Westminster Handbook to Reformed Theology*, 2001 の日本語版を〔私も翻訳監修者の一人として〕『リフォームド神学事典』の名で2009年（カルヴァン生誕500年を迎えた年）春に〔いのちのことば社から〕刊行できたことを、せめてもの喜びとしている。

正論が通るとは限らないのが世の常であるが、1987年2月のＪＰＣ第28回総会で出された「聖書の権威に関する宣言」（全文が『聖書信仰』1987年3/4月合併号[279号]に掲載）に、次のような文言が盛り込まれたことは、私からすれば遺憾の極みであった。＜「誤りのない」という表現において、聖書の内容を信仰的・教理的領域と歴史的・科学的領域とにあえて分け、その一方の領域においてのみ誤りがないことを主張するという立場をとらない。＞「あえて分け」という言い方で表現を和らげようとしているが、結局のところ《歴史的・科学的領域においても聖書には誤りがない》と宣言しているのだ。私は、いつも問いかけるように話していた。「歴史や科学の領域において、絶対に誤りがないと言えるものがあるのか。歴史にはいろいろな見方が許され、人や時や所が変われば、同じ出来事の見方も変わる。科学の真理も、ある時点で確度が高いと信じられる仮説の上に立っているので、将来さらに確度の高い仮説が信じら

れるようになれば変わる可能性がある。だから、《歴史的に誤りがない、あるいは科学的に誤りがない》という言い方は、止めるべきではないだろうか」と。

聖書はあくまで、〔救済史において成し遂げられた「神の大きなみわざ」を啓示し証言するという〕その性格と目的において、誤りがない（不可謬な、権威のある）「神のことば」である。それゆえに「信仰と生活との唯一無謬の規準である」と信じることができる。聖書の権威を保証するのは、聖書のアウトピストスに基づくアプリオリなものである。それで私は問いたい。〔聖書の権威を保証するために〕これ以上何を求める必要があるのか、と。私からすれば、無誤性の要求など全く無用のものであり、〔大それた表現かもしれないが私の気持ちとしては〕百害あって一利もないものである。

実は、このような聖書論論争に嫌気がさした私は、そんな論争から身を引いて、もっと喜びに満ちた生き生きした信仰生活を送りたいと願望するようになった。1983年の春に聖地を訪ねる機会を与えられ、そこで復活のキリストに出会わされる新鮮な体験をしたことを契機に、1984年秋から〔「ちいろば牧師」の愛称で知られる榎本保郎によって日本で創始された〕アシュラム運動に積極的にかかわるようになった。この運動にコミットすることで、聖書信仰が知的理解に留まることなく私自身のうちに受肉化され、〔聖書信仰にとって不可欠である〕霊性の面で格段の飛躍と進歩を遂げることができた。そのおかげで〔私の内にあった〕聖書論論争の後味の悪さも次第に消えてなくなったことを、心から感謝している。

聖書は救済史の中心に立つイエス・キリストを啓示し証言している書物である。それで聖書の権威は、キリストの権威と切り離すことができない。キリストは受肉して神が人となり、神人両性を合わせ持ち、両性を不可分なものとして統合しているお方である。その言い方にならうと、「人間のことば（人言）」で記されている「神のことば（神言）」である聖書は、神言性と人言性を合わせ持ち、それら両性を〔有機的霊感のゆえに〕不可分なものとして統合している書物である。ただし、聖書は〔その性格と目的において、あくまで〕キリストを啓示し証言するための書物であるから、聖書をキリストと同次元で論じることはできない。キリストの人性は神性との不可分な結合のゆえに無罪性を保証されている。しかし、聖書の人言性は神言性との不可分な結合が認められるか

らと無誤性（無罪性）まで主張できるものではない。そのことは聖書の写本や翻訳の実情を見れば明らかである。それでも「あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださった大きな愛のゆえに」（エペソ 2:4）、救済史を通してキリストを啓示し証言するため、〔無誤・無罪ではあり得ない〕人間のことばを用いて人間に語りかける道を選ばれた。先に紹介したベルカウワーは、『聖書（*De Heilige Schrift*）』の中に「聖書の＜しもべ＞様式」（英語版 The Servant-Form of Holy Scripture）という章を設けて、このことに言及している。マッキム編『リフォームド神学事典』にマッキム自身が執筆している「順応（Accommodation）」の項が参考になるので、その一部を引用したい。

> ＜カルヴァンは、聖書が神を父親・教師・医師として描写していることに、順応の根拠を見た。聖書における順応の三つの特別の用例は、律法（『綱要』2.11.13）、主の祈り（『綱要』3.20.34）、聖礼典（『綱要』4.1.1）である。これらの順応の用例を通して、聖書それ自体の言語で、救いに関わる神のメッセージが伝達されている。神は、ご自身がどのような方であるかを語るのに「われわれのわずかな能力に順応して、神についての知識をとつとつと語ってくださる」（『綱要』1.13.1）。……それにしても、順応の至高の例はイエス・キリストである。神はキリストにあって、人となることにより人間の世界に完全にお入りになった。カルヴァンは次のように解説する。「キリストにおいて神は、いわば、自らを小さなものとしておられる（quodammodo parvum facit）。われわれの能力の水準にまでご自身を低くするために（ut se ad captum nostrum submittat）」（Ⅰペテロ 1:20の注解）。カルヴァンにとって、神の啓示と救いのメッセージを聞いて理解するのに人間の限界は障壁とならなかつた。聖書という形において、記されている神のことばを表現するために、神は人間をお用いになったからである＞（210頁）。

＜しもべ＞の様式をとる聖書に固有の側面として、聖書の人間的・歴史的側面が重んじられなければならない。無誤性論者は無誤の神言性という側面を〔全面的に〕聖書に押し付けようとして、聖書の人言性を無視する「仮現論的な聖書観」に陥っているのではないか。「仮現論」は、キリストが人となったのは「仮現」であるとして、受肉の現実性を否定する異端的教理である（Ⅰヨハネ 4:2,3）。

無誤性の強調による聖書の人間的側面の否定は、同じ誤りを聖書に対して犯すことになる。個人的な感想にすぎないが、無誤性論者は仮現論的な聖書観に陥ることにより、キリスト論においても神性を強調するあまり人性を〔否定はしないまでも〕軽んじることになりやすい。そのため、〔福音書に示されている〕人として歩まれたイエスの模範にならうことに、また隣人愛の実践や社会的責任を果たすことに消極的であるのではないか。

私は引退教師の身分にもかかわらず、摂理の御手に操られて、日本長老教会から派遣される形で2007年6月にＪＥＡ理事に選ばれ、現在2期目で2011年6月まで在職の予定である。それで年2回発行の機関紙『ＪＥＡニュース』にしっかり目を通す機会に恵まれているが、2010年8月発行（最新刊）の『ＪＥＡニュース』No. 37の「The Book Shelf ―牧師の本棚」欄（page 8）に、フランシス・コリンズ著『ゲノムと聖書―科学者、神について考える』（NTT出版、2008年）が、ＪＥＡ神学委員会の責任で「ＪＥＡに属する福音派諸氏は、本書を読み進める中、いわゆる有神論的進化論（筆者は本書119頁で＜バイオロゴス＞との呼び名を提唱）が登場するくだりでアレルギー反応を起こし、パタンと本書を閉じてしまうかもしれない。だが、進化論に対する意見や立場の相違はひとまず脇へ置き、米国でベストセラーとなった本書を最後まで読み通してほしいと願うのが、評者の率直な思いである」と前置きして、好意的に紹介されているのを見てびっくりした。この書を私は昨年（2009年）春先に入手し目を通していたが、著者は私と同じ福音的キリスト者である。しかも世界トップレベルの高名な科学者として、最先端の遺伝子研究の成果がダーウィンの進化論を強力に実証している事態を明らかにし、創造のプロセスで神が進化論を用いられたことを示唆して「進化論的有神論」の立場を表明している。このような本がＪＥＡの機関紙に〔とにもかくにも〕紹介されたことは、現在のＪＥＡの度量を示すものであると思い、晴れ晴れとした気持ちで脱稿できることを感謝している。

（日本長老教会武蔵中会引退教師、日本福音同盟理事）